

和歌：文苑

著者	雄次, 桃江
雑誌名	龍南會雜誌
巻	6 5
ページ	6 0 - 6 1
発行年	1898-05-20
URL	http://hdl.handle.net/2298/5097

ぞ、いはゆるあその神山なりける、世にありがたき火山にして、そのもとつ形を、千年の後までも、そのまゝにとゞめ、そのすぢの學びのためには、こよなき標本なりとて、うちつ國の學者のたゞり登るは、さらにもいはず、遠きとつ國の人さへ、遙々こゝに尋ねくといふなり、ふじの煙は、すでにたぬぬれども、この山の煙は、今に絶えせざれば、う／＼とたちのぼり、東に靡き、西にたゞよひ、その色の、黒き時はをちかたまでも、どぐらく、白き時は、その口までも、見えわたさるゝやうなりけり、さてその近き所は、より／＼よなどいふものゝふりて、見るも苦まげなれど、このあなたよりみるには、さるかたのわづらひもなく、春の曙、秋の夕暮、さては冬の日、ふるしら雪の下より、轟きわたりて、大空を凌ぐ、萬古の剛風も、吹きたゞず、阿蘇山上、一縷の煙を、やうたふべからん、そのけまき、えも言はずなれば、朝夕これをながむる人々のおもひも、取々なるべし、天地の理りは、呼吸のふたつにあり、この山は、その故よしを、ときあかして、餘あり、剩さへ九州の巨鎮となりて、巔を雲根のくらきにさしはさみ、よものむら山を子孫のやうに、したがへる、をゞしきすがたなれば、

いざ學び終へての後、はたかき名をふきでの峯の空にたてなむ、どの心おのづからおこりぬべし、あなたふど、

和歌

待花

雄

次

さけは散るものとはかねて知りなから花まつ程と心せかるゝ

惜花

さなきたに花の命のみしかきをしはしはゆるせ春の山風

落花

さそふどて恨むは人の心なり花になれぬる春の山風

人のまだいはざる所いさよし

花さそふ恨みは人のこゝろなり梢になるゝはるのやま風

この方さらによし

深山花

なかなかのどけからまし人しらすひとりささきちる山櫻花

友にかはりて初めて女子をうませたる人によみてやりける

君か代の春のかさしどさきいてま花のゆく末千代に祝はむ

花の散るを見る

桃

江

色も香も松にゆつりて山里のかせのどかにも花そちりける

春月朧

あら田野の小田の蛙の聲さへもれはるなりけり春の夜の月